

Vol. 1.2 No. 8

1952年8月

倉敷昆虫同好会

ニジラヤホシテントウ
日本海沿岸に産す
安江安宣

ニジラヤホシテントウ (*Epilachna sparsa*) はその近縁種であるオオニジラヤホシテントウ (*Epilachna vigintioctomaculata*) と共に茄子科植物の害虫として有名である。筆者が此處數年来岡山県下60數箇所を採集調査した結果によれば、年平均気温 14°C の等温線を境界として、これより高温の地方にはニジラヤホシテントウがあり、反対に低温の地方にはオオニジラヤホシテントウが分布していることが判明した。具体的にいえば此境界線は大体國鉄姫新線と略一致している。又に就てはその一部を昨春秋の農業気象学会において既に講演したし、尚別に精しく発表する考であるから今こゝでは觸れな⁽¹⁾いことにする。

尤もこの兩種のマダラテントウムシ類が年平均気温 14°C 等温線を以つて棲分けていることを最初に指摘したのは高橋榮氏(1925)⁽²⁾、(1932)⁽³⁾であるが、最近北大の渡辺千尚氏はオオニジラヤホシテントウの分布南⁽⁴⁾限界の肉題について論じられ、年平均気温 14°C 等温線をとるよりも夏期平均気温(5月より10月までの各月平均気温の平均値) 21°C 等温線をとる方がより普遍性があると述べていることは全く注目⁽⁵⁾に値する。

同氏はニジラヤホシテントウの分布については何等觸れておらず、此種の日本における分布指標としては依然高橋氏の 14°C 説が学界に用いら



ニジラヤホシテントウの分布北限線(---)
と之以北の分布地臆(X)

てきたのである。もっとも高橋氏は此線以北においても1,2の例外を認めてゐる。即ち福井県敦賀附近にだけは本種が棲息しているが、これ以外の日本海沿岸地帯には島根県西部の江川までは隠岐島を除いて全然分布していないことになっている。

しかしながら、筆者が最近各地産の標本を調べたり、文献を探索した結果では14°C等温線以北でも前記の敦賀以外に4ヶ所の地臆においてニジラヤホシテントウが採集されていることを知つたのである。今これを北より順に記せば次の如くである。

1. 石川県江沼郡山中温泉。
2. 福井県丹生郡吉野村。
3. 島根県松江市。
4. 島根県出雲市。

(3)についてはM.G. Lewis氏が1918年7月8日に採集しており、この標本

は現在京大農学部昆虫学研究室に保管されている。(2)については1938年に刊行された原色福井県昆虫圖譜にあり、尚同書によれば福井県ではこのほかに大野、今立、丹生、敦賀⁽⁵⁾の諸都市に分布しているとのことである。(3)については1948年8月に当時京大学生であった鈴木、四角両氏によって松江市内の別々の箇所⁽⁶⁾で採集され、此の標本は現在京大農学部昆虫学研究室に保管されている。(4)については岡本大二郎氏(1948)の記事がある。これらの地質を従来云われてきたニジラヤホシテントラの分布境界線以北にプロットすれば附図の通りである。之によって明らかなように本種は日本海沿岸の低地帯では境界線を越えて相當北の方まで分布していることがわかる。

由来生物の分布境界線と云うものは一應の目安に過ぎず、精しく調べれば、只し線を劃してはつきりと分かることは極めて稀なことで、通常は境界線を中心として或る幅をもつた兩種の混雑地帯が存することが多い。このマダラテントラムシの分布についてもむしろこの例にもれないことは、さきに筆者と共に参加した京都地方に於ける杉垣健二氏等の調査や、中田正彦氏による関東地方に於ける調査によつても明らかである。併し境界線の幅を無暗と拡張すれば分布地帯が不明瞭になり境界線と云う意義をなさなくなるから、どの辺りにその限界を定めるかが尚懸念になつてくるのである。例えばオオニジラヤホシテントラの場合、渡辺千尚氏⁽⁷⁾は夏期平均気温 21°C の前後に $\pm 0.5^{\circ}\text{C}$ の幅を認めている。

さてニジラヤホシテントラの分布境界線(この場合本種は東洋系の昆虫であるから、日本の如き北半球においては分布北限線と云ふことになる)を年平均気温 14°C の等温線とする時、附図をみて気付かれると思うが、例外があまりにも多すぎる傾向があり、又若しこれらの例外をことごとく認めるとなると境界線の幅が広くなりすぎる嫌いがある。

兎に角ニジラヤホシテントラの分布境界の問題はオオニジラヤホシテントラの夫れと共に再検討を要する時期になつていのではないかと考える次第で、筆者の考えではその北限は現在の山中温泉より、さらに能登

4(81)

半島附近にまで北上する機会を持っている。そこでお願いしたいことは現在尚ニジウヤホシテントウの分布が報告されておらない日本海沿岸の諸地方、特に鳥取、兵庫、京都府下の地方で本種を若し採集されたならば、学界のために何等かの発表機関例えば本誌の「おとしぶみ」欄なり新昆虫のムシベン欄なりに是非御報告をお願いしたいことである。尚最後にニジウヤホシテントウが日本海沿岸では可成北の方まで棲息しているのではないかと云うことについては渡辺千尚博士も同様の意見をいただて居られることを附記する。⁽¹⁰⁾

〔引用文献〕

- (1) 要江要宣(1951): 農業気象学会中国支部例会発表.
- (2) 高橋 奨(1925): 病虫害雑誌, 12, 553, 614.
- (3) Takahashi, S. (1932): *J. Tokyo Nogyo Dai.*; 3, 155 pp.
- (4) 渡辺千尚(1950): 昆虫, 18, 1.
- (5) 福井県博物学会(1938): 原色福井県昆虫図譜, 同会刊.
- (6) 岡本大二郎(1949): 山陰農業昭和24年6月号. 20.
- (7) 船垣健二(1948): 松虫, 3, 121.
- (8) 中田正彦(1950): 応用昆虫, 6, 19.
- (9) 渡辺千尚(1951): 第11回日本昆虫学会発表.
- (10) ——(1952): 等者への私信による.

追記 本文を書き終えて後、等者は兵庫県美作郡、鳥取市附近、鳥取県東伯郡、米子市の諸地方を調査の結果、昭和27年7月23日鳥取市内の2地点鳥取駅附近及市役所前においてニジウヤホシテントウの群塊を発見したが、之とは別に鳥取県立農業試験場病理昆虫部には元當場技師水谷義清氏が既に昭和26年8月4日に鳥取市内櫛谷においてニジウヤホシテントウを10数匹採集された標本が保管されているのを同場技師千代西尾伊彦氏の御好意により拜見する機会を得た。従つて本文において記した新分布地点4箇所はさらに7地点追加された譯である。

[1952, VII, 28]

南方紀行

黒田祐一

外国に一度行ってみたい、而も行くなら熱帯の方がいいと豫て思つて
いた。強烈な太陽の輝く紺碧の空、飽迄青い海、原色の滴る様な花にお
とすれる美麗な昆虫、澄んだ夜空にかかす南十字星の下でシルエットに
なつた椰子林の中から聞える来りる原住人の歌など原始的な情熱の世界を此
の眼、この耳で触れたかつた。

幸にして僅かの期間ではあつたが本年当初東パキスタン、印度を訪れる
機会を得、捕虫網も手にしたので採集記を兼て見聞した事等ここに報告
する事にしました。然し小生の拙文が何処まで諸君を御案内出来るか
甚だ疑問です。

乗船中色々と御援助下さつた一瀬船長以下乗船員各位に対し紙上に更
て厚く御礼申し上げます。

2月1日

内司港にて

Y君御見送り心から感謝します、半年のアフリカ・印度航海を終
えて川崎ドックで修理中のK丸に19日(月)車を乗り着けましたが
ペンキの剥げてしまつた船側を見上げた時は少しくげつそりしまし
た、然し来込んで見ると外国客船だつたと云うだけに貨物船にして
は食堂、船室など想像して居たより上等でした。小生に与えられた
室は四疊位の広さで洋服箆笥、机、腰掛、バツト、書棚、扇風機、
スチーム、氷造など更に要領よく納められていました。隣に診療室
があります。6500屯(総重量屯8000屯)の巨体もドックを出る頃
にはすつかり見送るばかりにペンキが塗られました。25日神戸港

6(83)

を後にして瀬戸内海を縦横、陸中徳山港に寄ってセリントを積込み、内司港に目下停泊中で、ここでもセリントを積んでいます。

船では各自の職務を全て英語で呼ぶので始めドクター、ドクターと云われるのに照れくささを感じましたがそれももう慣れてしまいました。小生の役目である医薬品の補充と乗組員47名の予防接種の交渉も終り、後は昏迷地での出入の際検疫の立合のみで病人の出ない限り船で一日中遊んで居られる種族に屈しています。話によるとあちらでは12月でも船の明りを求めて昆虫が深山飛んで来るそうで「すから今から胸をおどらせています。

2月3日

いよいよ午前8時出港、針路を東にとり豊後水道を抜け、台湾の東を通り、ボルネ海を横切つてシンガポールに約12日間かかつて着くやうだ。これから数ヶ月内地ともお別れたと暫く甲板の手摺にもたれて朝露につつまれた街を眺めていたが寒くなつたので室に引上げる。

右と左に煙つて見えていた九州と四国の山々もすっかり夜の帳に覆われる頃になるとともにローリング・ピッチングが次第に強くなる、傳えるものは船腹を洗う波の音とエンジンの律動的な響のみ。

2月4日

ボーイの声で起る、ポールド(船窓)から覗くと丁度西方に一つの大きな島が霞んで見える、種子島との事、海水は内海に比はずつと濃さを増して来ている、時々白いかもめが翔が、空は曇り次第に荒れて来る様子だ、船は大きく上下しまるでシーソーに焦つて居る様だ。

晝食が終つてからそのままサロンでキャプテン等と話していた時ローリングの爲椅子もろとも横倒しになる、船が始めての小生にキャプテンが大丈夫かと尋ねる。サロンから自室に引上げるにも手摺を持たぬは歩けない位だ。航海士見習が「ドクター何んともないですか、僕は少し気分が悪い」と云つた。自分は船に酔わないのかもしれない。

内司で水温14°Cだったのがさう20°Cになっている。夜が更けるとともに

増々ひどくなり暗い海面が目前に高く盛り、又遙か下になったり時々海水がまさかこんな高さまでとは思っていたボードを洗うので余りいい気持ではない。

2月5日

昨夜の波もすっかり穏かになっていた甲板に出て歩く、甲板員が瀧に濡れたボードや壁をおちこちで拭いている。一時沖繩諸島の内の島が二つ見えた。けで後は四才空と海ばかり、海の色は一段と黒味を帯びている。

今日から空のチームも上り、体をつつむ風も暖くなつて来た、昨夜の不寝も何処へやら後20日許りで着くバキスタンを思つて胸をふくらす。時計を毎日少しずつ遅らして行っているので今日は内地時間より30分遅い。

2月7日

一週向もたたぬ内に冬から夏に一足飛びた、もうシャツ一枚でよくなった。午後4時頃鯨が船側に衝突して海水が少しく赤くなつた。ヒカ多分晝寝でもしていたのたろうとチーフ・オフィサー(一等航海士)が云つた、鯨は晝寝をするものだろうか？

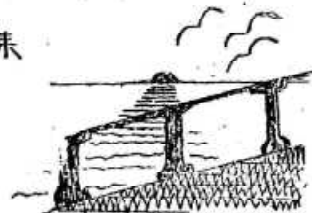
昨日は飛鳥が5匹甲板に飛込んでいたが毎日単調な様な船の生活にもこうした変化がある。

2月8日

朝食後サロンでキャプテン、パーサー(事務長)とトランプをしていた時開放したドア越しにルソン島が左舷に見え、かつてこのあたりでの激戦と現在を比べ感なきを得なかった。

2月9日

9時過ぎ毎日の如くボーイが室の掃除をしに来たので甲板に出て手摺にもたれて海を眺める、船腹にあたつて白く砕ける波、それにくつきりと自分の影がうつる、少し遠くに目を



8(85)

移して見ると始めは蒸かしらと思つた、すつと海面を一直線に或は弧状に、或は波の山にそつて上昇、下降している、それにしてはすつと飛んでは波に消えている様だ、じつと見ていた、あ！飛魚だ、きりりと太陽に体を光らせて数十米も空中を飛んでは海に消える。30区位一度に同じ方向に飛ぶ事もある。

月10日

ファスト・エンジニア(一等機内士)にこの船が毎日消費する油は28屯程でドラム罐で云うと140罐必要と聞いて一寸驚く。寒暖計は30屯を越える様になり雲も入道雲の様相を呈して来ている。

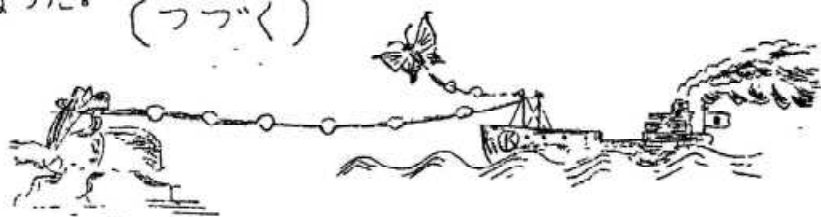
月12日、

夜半夢うつつでバラバラと云う音を聞く、むしむしとして暑い、足は汗で氣持が悪い起きてみると未だ5時だ、甲板に出てみるとやはりさつき雨が布つたのだ、しつとりと黒く濡れていた、中天に満月がかり波は銀色に輝いていた、全身涼しい風につつまれて何ともいえない良い氣持になる、船は戻いたボルネオ海を一路シンガポールに向つて走っている。扇風機が朝から必要になつて来た。赤道に近づくに従つて風邪引が多くなる)普通船員の室は下にある為には暑くて甲板へ出て履るからだ。

月13日

いよいよ明日はシンガポールに着くのだ、ボーイが靴を磨きに来る、甲板ではクラーク(事務員)、サード・オペレーター(三等通信士)など若い連中が散髪してもらつている。

一日中同じエンジン音・響・海と空、何も同じ所を走つている様な感じだ、地図のこの辺りを走つているのだと云う奥感がともなはない。夜になると港に近いせいか明りをともした船が遠くを通り過ぎるのが見られる様になつた。(つづく)



(86)9

本年はウスバカミキリが多い様である。

(小野 洋)

シオヤトソボの 遅い記録

本種は春期最も早く出現する蜻蛉の一種で当地(勝田郡勝田町)では四月上旬に既に羽化し六月中旬にわたってその姿を見ることが出来るが、今夏後山で六月下旬に1号を目撃した。かなり遅い記録と云って差支ないと思う。(註-28, 1952)

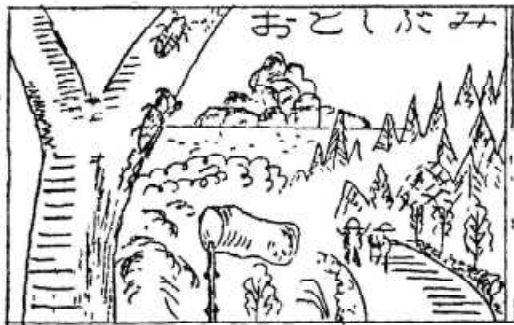
英田郡東栗倉村後山

(安東瑞夫)

キマダラルリツ バナの再記録

先に本種1号を採集したとの報告をしたが前回の採集に於いて偶然に本種を採集したので若しやと思ひ同所(勝田郡勝田町久賀)を訪れたところ、再び1号を得た。西村氏の私信によれば池地の例から見て近年急に大発生するのではないかとのことである。来年あたり特に気をつけて見たいと思つてゐる

(安東瑞夫)



トホシカナムシ

Lelia decempunctata MOTSCHULSKY は体長17~22mmの大型種で暗黄色、前胸背、小楯板に10個の黒点を有する。日本全土に産するが個体数は少いらしい。本年7月11日、伯耆大山の山の家附近で本種1号1号を採集したので報告する。この外、同じく守月12日に青野孝昭君が太山の登山路で1個体、更に8月1日近藤光宏君が郡山山の菩提寺附近で1個体採集の記録がある。

(小野 洋)

今年のミヤマカ

ミキリ

毎年本地方では主に鶴形山で少数の発生を見るがかなり少ない。本年の7月13日鶴形山で筆者甥、末広泰憲が1号を採集したので報告する。尚

10(87)

ウラナミジヤノ ナの新産地

本種はかなり少ない種で産地もかなり限定されている様であるが、総社町附近では総社町門田の櫻谷が産地であった。しかし6月21日総社西中生物班で清音村軽部山の調査をした際、ウラナミジヤノナを採集したのでお知らせする。予定は軽部から軽部山へ登り黒田へ行き、同じコースを帰ることにしていた。しかし帰りは近道を選び他の道を帰った。初め登りがけの軽部水の奥と云う所から出発したのであるが、丁度ヒョウモン類の出盛りでクモガタヒョウモン、ナスクワヒョウモン等がとれたが、ふと足元の茂みから飛び出たジヤノナが目につき、すぐにネットに収めた。それが意外にもウラナミジヤノナだったので皆でよくさがしてさらに二個体を得た。どれも新鮮なものばかりであった。ヒナウラナミといたが多くは古くて破損していた。水の奥から黒田までは見かけなかったが、帰りに下軽部を通ったとき、又一個体得た。これも新しいものだったが他には見あたらなかった

これらのことから、軽部山北側にはかなり発生するものと思われる。或いは黒田あたりからも発見出来るかもしれない。深く調査すれば面白い結果を得るだろうが、ここに報告しておく。

(水野弘造)

蝶の訪花 2,3,

次の様な蝶の訪花も観察したので報告しておく。

★1952年7月12日、伯耆大山の横手道でヒナウラナミジヤノナが *As-telle Thunbergii* Mia. トリアシショウマ(ユキノシタ村)に飛来。

★1952年7月12日、伯耆大山の横手道でクロヒカゲが同じくトリアシショウマに飛来。

★1952年8月1日、那岐山でジヤノナが *Dianthus superbus* L. ナデシコに飛来。

(小野 洋)

ヒナマルカナム シ

Coytosoma biguttula M-

OTSCHULSKYは県下では北部に比較的普通に見られるが多からず、山地性のものの様で、南部ではいまだに発生を見ない。本年7月12日、伯耆大山で本種を気をつけて見ていたところ、タコラ山のマルカナムシの如く、いたるところのハギに非常に多く発生していた。大山では多産する様である。

(小野 洋)

金山にイタヤカ ミキリ

Mesynrippus pubicornis
BATESは本地方に於てもかなり稀なものであるが、本年松井俊公君により6月22日、金山より採集されたので報告しておく。標本は筆者保存。

(小野 洋)

子ヤイロクダブ トカナムシ

Arma custos FABRICIUS
は岡山県の北部山地でもあまり見られないものであるが、本年7月12日伯耆大山の横手道に於て、ハバチ科の一種を捕食中の本種を観察採集したので報告する。(小野 洋)

(88)11

キアシアトコバ チ

1952.6.8, 西日の照りつける午後黒田浅原向にておい蚊くぬぎの葉裏でオオミドリシジミの蛹1を採集したところ、この蛹はその色から見て羽化する直前の様で、だいじに持ち帰ったが一つこうに出ない。数日後蛹を見た所全長6mm中2mmばかりの本種(*Brachymeria obscurata* Walker)が蛹へ2mm程の穴をあけて出ている事がわかり本種がこの地方においてZephyrusの一外通である事もここに報告しておく。

(近藤 光宏)

大山にてアカ スジキコカチ 採る

去る1952年7月22日、大山横手道でBeatingによつて本種1個体採った。これは前号Vol.2No.6にも述べた様に山地生のものでかなり珍しい種であり、大山

12(89)

でのアカスギキンカナはこれが初めてで、又同23日には本会の若林君も同所にて1個体採っていた。

(近藤光宏)



黒田のミドリシジミ

黒田は、ゼフィルス¹の豊産する所で珍種ラスイロオナグシジミ、ウラジロミドリシジミ等もある。又オオミドリシジミやウラナミアカシジミ、ミスイロオナグシジミ、アカシジミ等も他地とは比較にならなぐらい多い。しかし僕が今まで見つけた黒田産のゼフィルスは以上六種であるように思っていた。七月六日、朝自転車を飛ばして黒田に行った。オーに感²じたことはいづくゼフィルスが減っていることだ。六月には何百といふウラナミアカシジミもヤツと30頭くらいしか見あたらない。しかし、とんとん木をたたいて行った。ふと黒い蝶が飛び立つたのが目に入った。丁度僕の前の木の葉にとまった。すつとよって見た。動かないオオミドリによく似ていたが少し姿に思³つたので捕獲した。やはり舌が⁴ついていた、ミドリシジミであった、しかしそれからは何もいなかったので(目的としたラスイロオナグもついでに出でこなかった)帰ることにして引き返したとたん⁵に又一頭飛び出した。急いで採つたらやはりミドリシジミであった。今度のは雌であった。(始⁶めは雄)。この雌は0型であったが雄雌共に小破していた。採集しておられる方もあるかもしれないが一応報告しておく。今まで報告がなかったのは、本種をオオミドリと間違⁷つて見逃していたのではないかとと思われる。

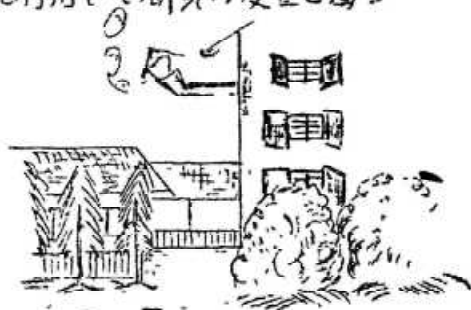
以上

[水野弘造]

“大原農研図書館の利用を図る”

昆虫を研究して行くうちに最も必要になって来るのは文献であろう。文献を参考にしない時には珍しいと思つて自分が得意になつて発表したことが既知の普通的事実であつて他人から笑われたりする場合も起つて来る。私でも現在になつて過去の発表した事に就いて穴にでも入りたい感があるものもある。しかしこの研究に欠ぐべからざる文献類は現在のなりまだしも古いものは手に入り難くそれ等の大部分を個人で集めることは巨費を要し長い時間が必要となる、けれども虫にはあまり悪まれていない様な倉敷にも大原農研研究所があつてそれに附属している図書館には昆虫関係は勿論農業に関するあらゆる図書が多数保存されて研究者の便宜を図っている。研究所に關係ない者は勿論私立なので閲覧料一回金10円也を徴収されるが一日おれば“ゆつくり調べる”ことが出来る。私が現在調べた昆虫関係の文献を列举すれば雑誌類では、昆虫世界、昆虫界、Zephyrus、あきつ昆虫学雑誌、関西昆虫学会会報、むし、松虫、生態昆虫、新昆虫、関西昆虫学雑誌等は一年一巻から全部揃つて居り、一部欠けているものは昆虫、虫、自然、採集と飼育、その他多数である。単行本では日本甲虫学平山氏の甲虫、蝶等の図譜松村松年先生の図鑑類その他多数に及ぶ、本図書館に就いては知りれない事はあまり居られないことと思ふが我々は他地亦(東京、大阪等を除く)の入々より文献類を自由に見ることが出来るのであるから大いに利用して研究の便宜を図るべきであらう、又図書館の方も本年新しく増築されて居る様である、この夏休みにも行って一応目を通して見る機会を持つたいものである。(X)

14/vii 1952



14(80)

第四回学徒博物コンクール、見たまま

4月中旬開催と予定されていた本コンクールも種々の事情で遂に虫の月6月に持越され、しかも開催当日が日曜日とあれは我々虫ヤにとっては採集面にかなり痛いのであるが、なんと云つても一年に一回程度の発表論文40篇の多きにのぼる盛況で昆虫関係のものも少なからず見られると云うわけならば、これ又我々の見逃し得ないところである。さてかくなる複雑な心理状態で待ちに待ったコンクール当日(6月1日)は席会午前9時と云うのに日曜日の朝のそれの如く廊床でのんびりとしておると時は容赦なく過ぎて時まさに9時 *home* を *start* かなりの *spread* であだふたと大原農研の門をくぐる。空は曇り勝ちを、陰鬱な感無きしもありず、会場附近に歩を運ぶとヤがて正面の受付の紙のその後に入野洋氏おこまかにデーンと腰をすえているのが見られる。ここにて受付の紙等に自分の氏名等記録し小野氏の横に坐り込んで受付の助手格となつて来る入々をじろじろと眺めている。さて目を転じて場内を見ると満員の大盛況椅子等持ち出してもまたあふれる始末、かなり混乱を呈して椅子を続々と持ち出しているのによやく重い腰を上げて手伝う。右往、左往する入々の中にみさしがりの中塚さんの元気が顔も見られた。かなりの混乱の後席会これ又日本人の行う会合の例にそれず約30分余もおくれたのは最初から黒星、9時半遅いよいよ席会、始めの主催者側から佐藤岡山博物同好会会長のあいさつあり続いて論文発表に移る。へき頭、地元西藤造三君(倉敷東小、5年生)の題して倉敷の昆虫とは嬉しい。堂々と述べる倉敷の昆虫相の一端に黒田のハイイロヤハズカミキリ等出て来るのに嬉しくなつてしまった。多数の拍手を浴びて同君の発表を終り次々に小学生級の可愛いらしい声が続いて午前の部を早くも11時過ぎに終了いずれもこのあたり佳作なので印象に残る様な研究はあまりなかつた様だ、昆虫関係のものも2,3あったがもっと突っ込んでやってみたらと思うものが多かつた。また少し早いので(午後の部は1時から)

倉敷天文台を希望者のみで見学するそうだが当方よく見なれているし昼向ではパツとしかりので我々は中止、そのあたりを片づけ少し早目に昼食をとる。午後1時再び開会授賞式が行はれ大原総一郎氏の手によって賞状が渡される。近藤光宏氏欠席なので老松高校の藤井先生が受取られた。続いて午後の部の論文発表近藤氏欠席に付き20番から開始実に残念このあたり一等賞の研究ばかりでいずれも優秀であった。

特に岡山県知事賞の「中海に於ける末朝の研究」鳥取県からの遠征であるがさすがに堂々としたもの、只観察だけに止らずその要因等深くついでる力は感心一とは閉会後の青野氏の弁、このあたりから今迄曇つて、いた空は今にも降りそうな気配でこぼれ降らないうちに発表者を中心としてパチヤリとやることになり又机や椅子持ち出して大騒ぎを演じグラグラの机の上に立って命からがらカメラにおさまる。写真をとり終つて直に論文発表に移り岡田君の「鈴虫の鳴く活動について」は鈴虫の鳴く日週文化を述べ鳴声を音符で表示したりなかなかくわしい。=神君「蝶類研究」これ又遠征である。愛媛県の蝶相を述べる。蝶類研究等ばくせんとしたかなので何と発表するのかわかると思つたらフオーナの説明にまよる、しかし四ヶ嶺、石鎚山等飛ぶ出しうらやましき限り、本会永野君の蝶の採集と研究は私と小野洋氏一寸所用で見ることが出来なかつたのは残念、青野氏によればよくやったとのことである。この青野氏室内に於てヒラタムシの如き平たい背をこちらに向けて発表者の図表を貼つたりうがしたり又やや緊張した面持で発表時間の終りを告げるリンクを打ち鳴したりなかなかの活躍振り、かくして興味津々たる内に発表を終つたのは5時半直ちに解散し雨は容赦なく降りそそぐ中を器具を運んで後かたづけを行い後楨我々は解散した。もうあたりは雨のせいが薄暗かった。以上で見聞記を終るが文中失礼な言辭をはいしたところは御許し願ひ度い。最後に昆虫関係論文をあげておく。

発表順 佳作2 倉敷附近の昆虫、西藤造之、倉敷東小5年
 //4 蟬の生理作用の研究、角正一郎、川面中3年

16(92)

佳作9, ホウフラの観察, 山田文子, 箭田小4年,

〃〃10, ラジからハエになるまで 原田洋二, 岡山旭東小3年,

一等倉敷市長賞19, イラガ空齋中に越冬せる生物, 近藤光彦, 倉敷老

二等賞26, 鈴虫の鳴く活動について, 岡田建一, 鳥取八頭高2年,

〃〃〃28, 蝶類研究, 二神康朗, 愛媛大附中3年,

三等賞33, 蝶の採集と研究, 水野弘造, 総社中2年,

無審査40, 我が庭の介殻虫と蟻, 能登登美子, 津山東中3年,

(Y. S. H記)

編集後記

本号 Vol. 2168 は先ず安江要宣教授の重要かつ立派な論文があり、編集者心から感謝いたしています。又一方黒田祐一医師の希望のもてる明るい紀行文などがあり、楽しみにしてつづきをまたれる事と思う。それに

おとしぶみらん
では小野, 安藤
水野三氏の御協
力により, ぶし
本号が出来上り
ました。では皆
さん暑さにまけ
ず気をつけて今
後もしっかりと
活やくしてくだ
さい。

すずむし 第2巻第3号

昭和27年8月30日印刷

昭和27年8月24日発行

編集者 近藤光彦

印刷者 全

発行所 倉敷西小学校理科教室内
(倉敷市新川町)

倉敷昆虫同好会